色音 四十二

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印
東京大学総合図書館

光りし給はし後の世にもかけさせつき給
御門人をしてみつから此道をしけりて尋ねかり
それぞれかの兄のもとを分けてまつりしいへた
志けりし當代の三の宮御はしめにしてそれ
ひとそ給ひし宮のわか君と二の姫君の御方も
さ給へりいと若くして御かたち給へると
使さまさせ給へりいかてすゝみつ様にうそれ
人さ給へりよ給ふしく何てよゝもとかみ給ひを
いく年くさ給ひかたかつらひとよく人おほし思ふ
かしかりさ給ふのいかしくの四のえ見て申さらさ

000583952 7

東京大学総合図書館

けり給ふおもしろくうるはしくなんかうなまめいたりける人なり
かりなりしむらさきの上御心よせことに
こきこえし給ひしゆへ女一宮は二条院におはします
三の宮は物なれは六条院にわたりすみ給ひし東
のたいをその代の御しつらひかはらてたち給ひて朝
おりにふれおほしいてゝきこえ給ふこそ宮は
ことに春宮をはさる物にてみかときさきかきり
なくかしつききこえさせ給ふ宮なれは内すみを
せさせ給へとなを心やすきふる里にすみよくし
給ふ御元服し給ひて兵部卿

宮ときこゆ二の宮もおなしとのゝ寝殿を
時々の御やすみ所にてましませ梅つほ
をみさうしにして右のおほいとの中の君を
え給へりつきの坊かねにておほえことに
物々しう人からもすくよかにおはい
し御むすめ右のおほいとのはあまたもおはせす大君は
春宮にまいり又きしろふ人もなくてさふらひ給ふ
その次々もついてのまゝにと人はおもひきこえ
られ御心にもさやうにおほしきさいの宮もきこえ給
ひけれとこの兵部卿の宮はさしもおほいたらす

我御心よりたゞおはしますさへうたておぼしめ
御身の御心よりほかに世はかなく物うくおぼし
はかなくて侍りしかばことわりなれどもいとくちをしうさる
べき事を思ひ給へてことにさるべき御ためにはしる
御事ていと侍らずかしまことにわかれ給ひにき
右大臣殿の御ために我もかくものおもひ給ふ事
いかにもかくの御ことゞもさだめ給ひて
院の御おぼえにて侍りし人々にて
つかはされたる事もなかりしかば
御わかれのほどのことゞもいと心ぐるしかりけるの

かんだちめなどうちのぼりて御前にて入道の
宮は三条の宮にわたらせ給ひてひさしき宮
もたてられて内にも院へもまゐり給ひつゝ
御心にかはらせ給はずして右大臣殿の御
うへにて侍りしかどもいまさらにいふべき
御事ども世にもてはやされておもひよ
いかにもならせ給ひておぼつかなき事
世には御心のまゝにてうせ給ひし世のありさま
御かたみに院のうちよりもてなされ給ひけ
まことにかうしてまゐりし御かたのみこたちは

にまちの二条の宮とさうしそへまつり給へく
なむ三条殿と二条院とにすみ給へきよしつか
まひなと給ひける二条院とてはしめ奉
六条院の大将のおとゝとて世にゆへつきし五代
まてなき御おほえ人にもすくれ御心きはのさかな
りたりし人てはなり御かたはらいたきまて宮
ちらのゆうしろうきありけりひきこて給へれは
二条院のさたの御手なとたいまし人の心みえ
てはまうにおはしたりけるこそいとゆかしう侍るなる
なりつゝ侍り給ひてもたいへの御かくても

すゑの世にも侍り給ひて侍しかは伊予の守
とまうしてはふさうのおんてそてまうし
はからいたうもいとゝ我つゝむも見ん
ありしきみきこえしゆくて今はせかはおもう
あやしうにおほえてきこえて給へはかめはしさの
人かんとおひきこえて人もさこそかくまつけ
ても代々て火ともちらにうやうふかなに申も
をしたまへなけこさせ人々応なすらんと
うちの者うに付人くゆえく宮なら給ひ
はゆ者はひくきさは者りく御身侍まれは

さはれとて、ことに、かの紫の上の御方の物語をこひ
しかそ、そよりの川の手にならひて、きこえ給ふ事
の御いけになりて、ならはしもおほしくさの物
ありさまし。二条の宮の御方は院の手にて給ひ
侍りし。冷泉院の御所をかはりわたりておほし
つき中宮にみこらなきの世をゆかしく思
ひはらぬはさるべきにかなはぬ事にて
ありけるやうに、御心ばへもおもひかけぬ物ならし
院まで御覧ぜさせ給ふ。三十にて二月に元
うまれ給ひし林右近中将になり給ひしかなり

七
なかいふとも御心はいつこにもよもはれまことにいそぎ
ならへくおほえひさせ給ひ給ふ。おほしますまゝ
帰りまゐるを御心しみて、ありつひるさと清
給ひし、まろのまうへありて、はらひまてとく
遠きほとえりつゝ、さへおほえぬありて、おはしまして
こゝさへさせ給ひつゝ、世にたへぬ女房になりて
よく紛やもしとて、御けんするはいみじく侍り
わつせ給ひし院のくらゐをつくまいらすなく
忍ひのとせにほのかに御きはかしはさ
くさにおもはされ給ひし世の事女御

ときこえしやうにも女宮なとはたゝ一所おはしま
しける御はらからもかくつきなからおほえ給ふ事なし
おほうすきさいの宮の御すゑにて年月にそへて
いとゝ給ふにけたかくそおはしますもとなき
まてならせ給ふを宮はいとゝかなしうおほしたるを
しなりて年ころの御念仏年月にそへてのみ
いと深からの御心にはきこえけりとて給へるつ
まれにておはしまさぬは此宮の御かたにて入らせ給ふとか
やかて御やうの小事なれとも御心の本意にて
いまはいふかひなくて院にも聞えさせ給ふ

りし春宮にてつゐに此宮にもおはしますへき
ありしかとも御かくれ給ひにしかは御かたの
なけきそ給ひてもの心をまけてしとそたま
えなきにおほきなれはなにははかなき事を
おりゐさせ給ひてのちつゐにものなともて御前
御身の人のなき宮にたてまつらせ給ふき
みてもあまりとおほさるゝにかくいつかれ
むかしのほとはとのゝ御事にてもおはしまし
なとはこの御事のあまりまてもあはれなる
ものをかしう御とりみたしせんかたなしけり大

師のみやをさへひきえんけりもえてまかりける
ひとりあそばれける
おほつかれ年来りこいゆへ何かわてに
めもあらぬわが身はらふ風を人の身のをに
あはれとや身のはしはくかのものとるもむて
めしなる世をふけみえるひうそしつきも
うくのりのめくてちを風情し給ひくまにめ
めくらむとえてきたにえらむおもて御給ひん
かへおもしろをすさのまの御まもめしてこと
おもしなりあまし行りえしくてなさはりやい

あしやいはつゝむへ我らのきこてまかり秋まい
くしこえ我あらんとる人の御我をあらんとよしま
いり善ゆとめ給ふ風さを見てえつも御てあいと
我給ひる女の心ありたはいふもちをみ房を
わきつるに玉と女の我給ひも心をかくしいはの
中に行しもあらんうしろの雨我をまれこの心ち
ささすけくおもしい後の無我をゆとせぬれ
ふきまひふえも人て風をかくるえひはもをは
まいてやあをおもしたるに世我の御てもあいち
せまり我もはれさて元服して物うかりけり

けはひもえすまひもて給ひてはのつゝ世中
ましておもほし猶さまりてなきやうなりぬ
此御かたも参りてつきのこゝろ志川まり給へり
うちにも宮の御ありさまの御せ物して
とおもほしたる物からたゝさしもきこえ宮たちも
めつらしと川わたしいて宮にも給ひける
おほしてなをひたまへいとそのしとたきくあり
まゐ給すの御書ほしまいれ給ひてかくあらしれ
とのしくて元見えの御もの院の御かたの御
しゆひいそきてあまひ律右の御わたしも我

いたくさらりて此君は二位や小中将とのく
なそちりし律師こそて給ひ見ゆる心さして
しいま大将中将て兵衛の君おほし此の心物こそこ
見給ふ人々もそひてかくのみかうしたつよ
いともくおもと何りし小宰相よ世との物よ
くる世中を人より佐はしはとそしはら小宰相
大夫の君よりさて宮て中かうとして志川給
ひつかさりかつよ此君もかさきさ人のか
出こ物うとし給ひてほの世此みつなり
らし給はさ川きりけるまてみさしう

はけきおもひてよみいてたりしものことはふかく
君に代々のあとをしたひて異なりけり給ふ事
うたのみちをもおさへ給ふなる流の人まて
此世の人とはつたへりそ流りうるかりのよ中れ
まことと見ゆるものもそむき給へりかなしくてそ
こけしとてこそなむとられそらあはれまつるも
見ゆるうたをも古今の体となかれゆしくなる
うけまなひおもへおほかりけなりけれは此人
にあまりたるなかくなしさたこの世の人おもひ
むかし文あるやうにれまてうちあるまし流給

萬の言の葉しけく萬てつゝり花の香を風は流
歌の道百敷のおほきくもはりあたへきわひしる雅
色ありまなひあつめ明星の何やつまけれは
高行なるやいあるへきさ流く我は人
流るんとよみていすへてたのもかくなりまて
うけし世しらんてもみな雲井の君はの跡
君ありあまりしこたに流さかりてわさく
ことしも流け給とわすらのいかなるい川よ
うけ出てうたのうたしこれ君の子よし
しな我まてひとしく人おまへの紀の事うたを

袖かけ給ふ梅の香は春雨のしつくにも
ぬれ身にしむる人おほく秋の野にぬしなき
藤袴ももとのかほりはかくれてなつかしき
追風ことにおりなしからなむまさりける
かくあやしきまて人のとかむる香にしみ給
へるを兵部卿宮なむこと事よりもいと
いとましく思してそれはわさとよろつの
をしめ給ひ朝夕のことわさにあはせいとなみ
まへの前栽にも春は梅の花そのをなかめ給ひ
秋は世の人のめつる女郎花さをしかの

つまにすめる萩の露にもをさ〳〵心うつし
給はす老をわするゝ菊おとろへゆく藤袴
ものけなきわれもかうなとはいとすさ
ましき霜かれのころほひまて思しすてす
なとわさとめきて香にめつる思ひをなむ
たてゝこのましうおはしけるかゝるほとに
すこしなよひやはらきてすいたるかたに
ひかれ給へりと世の人は思ひきこえたり昔の
源氏はすへてかくたてゝそのこととやうかはり
しみ給へるかたそなかりし　源中将はつねに

これ宮のさかりはてゝ　いとましくおほしてまつし
あやし物の様を吹よそへて　うつしにほはしわかす
さらにおもひよらし　春は梅の花園をなかめ給ひ
いろよき人はすめり一条の宮の御中ねときて
にほひまさりてくちのはにもれむことのはにも
らむ山にほひ萌ほとうつくしいもとなからそへて
さらにてなよし　給へるもあはれに持てまさる
あやしもたゝる人あたりなけれは花のくひよりて
人のなけれはひかりさやそへてまさきかほり給ふ
わさとかほりつ花てたゝはかなからはこそまた

なり冷泉院乃女一乃宮をみまほしくそおほす
てもみたてまつらはやかひありなむかしとおほしける
女御もいとおもりかにおはしまして
まそ姫宮の御ありさまもひけうに侍とあるかたちよく
おはしましけれはいつきまうすさまそのかうさま
らひ奉てる女房なとのくちつきもつゐに御前ま
なとにはまいりて見つるなとをもあはれ
侍よくおほしめすにかひかすなりける中将は
世中をとおほくあらきものにおもひて
自分の心なれは中/\つゝしみてゆかしき事

くらゐをやすらひ給ふとておほ人はまうしつゝ方
思ひあらしあかつきかてはれんはさりまう
さしむすまし給ひて後あなたにて人のあらし人方
年のみきはとの後にをもやあかし人々
ゆるしぬるしともにはいかにても人
人々に次十九にならせ給ふ年三位の宰
相まてなり中納言にける大将は門きさいの
宮の御もとて参りにさてはいてかりけれ
たてまつる人のおほしてり御給へとものゝ中まい
せも思ひとゝめられて御覧にあそはせりけり

けさはいまはの世にてたえはりしかはとさく
これはすゝろいはしもてまつりけはなれつゝ
おほえけれは御殿人はまゐり給ひつる三の
宮の年月にそへてなりにける院の
姫宮の御かたりをまゐらんにはかんの御上
明暮さらにもとけ給ひてはしらにまてまゐる人
のまゐらんとみえて給ふはいとなくて御すら
あはれにくれの御かたにさ海の年のたえたる月
らいけれみの年まさしきの人のあなたそみえしそ
いかのかたの御殿へ御前つくまさしうまていふ

思ひけるまゝにこそかきてつかはしけれな
うおもひしあまりに宮のうちへ入て見てより
かやうにけしきかはりて世の中にありて御まへ
まゐりけるは何事かありけんとおぼす
よしおもひしかば心にはよもおもはじ人ゆへ
くいとはしきありさまにて物なまめかしく
かりきはいかなる人ありけんと思ひつゝ
ありさまなりとも心なきにけるの一葉
ちりしおもひもかけず思ひ入てけるにも
おくるゝ身ぞかなしけれなほ心にかゝるつゆは

はりの御かゝるとかおもひまゐらせたる人のためには
いとくるしうおぼえてみだれそうらへば
いとおこがましく情なかりける袖の中にもや
御きさきを思ふよりの人は侍るまじければ三条の
宮ありさまのあはれまさりて何事ありつる邪
こそあはず候けるわきまへなきはなまめかし
よりもなにとも心のおもひつゝはじめてことさら
おきてこそはこの人の心なれば深くいたはりけるに
はりすなほなるこそ見む何かの人の心
ふかうは思ふ人と御心なくてのみぞ

あてみえしく次宮のおはしますにも御代々の御
つほは朝夕にまうのほりせんせられしかんて東ん
なとなからさる御方は右のおとゝも何ましく神
給ふつもをあさらとものかくてしる御たし
たまひなりえこそ給はす行へゆかしけ
な君かほしさはけ思ふなせとも宮つらもそ
とものて手は参らす人のかたへおりとなほさき
みゆるあはせられとおほしまつ将監にれさ
よりておはしまし此宮の御事をかゝすうれしく
おもしけれともけせなとゝもしみそきて給ふ

よろひおほしめしたりしかとも父君なへおほしもうらは
なりしれとものあはしらおほしらく一条の宮
此ほとのすめあはせけるなとてとまにのあはせ
くしきも人はかりなり給へりはかりはしかりて
これもてまたせうさていかひとも心もあらは
てら見をきん人のあり蔵人の人にひとそ
あへりしをもおほいてゐとしてかう物ふなう
なとはりてあいなう給はすと父のしつまゝうし物
こなたせきそく人の心もつゆもそらおはく
はちよかしけゆるかへのゆかりあさりしの

とうけ一条院まていともものものしく見え
この御いをし給せんのうへつかひしかりけるその
日みこたちもまうてられまゐらせ給ふはみかと御つかひ
まふきさいたちいつもまうてしもかく見えめてたき
おほしけるに見て御中みちも此女御の宮けに
侍しとはおほくあるよしおほしけるに見て御やう
此宮もなるの宮も院にゆかりかゝるものも侍宗
もひとへよしおほしめしかり給ふ例の事らい給ふ
うちにかへりまゐらせ給ふも侍らむこそ大
将まてにも女御の宮ひとへの宮東院いらか

此五月ことしも清涼殿にて上達部か
給ひしの後そたまふ宰相の中将いまゐりたる
おほしけるにて給ひしの御かうしさらにおつまれ
けさ御さぶらはさいりしかまへはむらつめさせ
給ひし此清水の権中納言右大弁なとさ
らはんとらめにのまへ上達部ともまいりまゐらせ
侍らむひまてて一条の院にかへすみかとの御在
ほとりには香の侍るとゝはかりえんなりたて事
時しものむかしきこそ給へりいそきてこひ
おもひ入給にけふの御前きて侍らんなれは

此二國のうち筆しのおりつての色と名らといふ
とこしもとみてありけん承は此名をも此えさ
しにつ孫のことみすこしも或は中かねつさやうり
多勢ことにむかくとみん此以多らん此後
此以さけりおもしかるゝけるともしまるまて
おりしろなり給ことゝめ高以了神とも
此うら色次立をせコおまへ北勢様の所もちう
あところひらうもこ多ううわひの仍と村ゆうた
ま例の中ちやうし此御うへとちうまてまた
されて候ひちうと地さめうしへ川ふの事と

女房たちも中にいあるなきしと色やましきほと
あまてと名にいそにうつ梅けまたりけるまて
然くきこてあつけおもしとみてつしと見給ふ
かくらうようのてつ孫よりてさう所りてそれなる
さ事りおさあ給つうを見給の名け也をわれ勢
らん給へや候さうとちいへいしとの給へは
にくかうあ知らに神のますあと

B 7874

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館